

## 効果的な臨床看護研究指導の探求:文献の活用を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮子, あずさ, 菊池, 麻由美, 佐藤, 紀子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20780/00032072">https://doi.org/10.20780/00032072</a>

[資料]

## 効果的な臨床看護研究指導の探求：文献の活用を中心に

宮子あずさ\* 菊池麻由美\*\* 佐藤紀子\*

### EXPLORING EFFECTIVE CLINICAL NURSING RESEARCH GUIDANCE : FOCUSING ON UTILIZATION OF LITERATURE

Azusa MIYAKO \* Mayumi KIKUCHI \*\* Noriko SATO \*

キーワード：臨床看護研究、文献研究、アクションリサーチ

Key words : clinical nursing research, literature research, action research

#### I. はじめに

看護系大学が増加し、大学院生やその修了生たちが研究の中心的役割を果たすようになって、臨床における看護研究は現在も盛んに行われている。坂下ら(2013)が行った中・大規模病院を対象とした質問紙調査によれば、88.4%の病院で看護研究が実施されていた。そして、その研究は、輪番や特定の年代の者が行い、研究が終われば研究を離れ、継続されない。また、研究資金が少なく、文献検索を行うデータベースなどの資源も不足している実態が明らかになった。加えて、義務づけられた看護研究が看護師の負担になっているとの指摘もある(中野ら, 2014)。

本研究では、こうした指摘の中でも、特に文献検索が不十分になりやすい現状に焦点をあてる。臨床看護研究においては、文献検討が不十分で、テーマの絞り込みが行えないとの指摘があり(坂下ら, 2012)、これが研究の成果を乏しくしている原因と考えた。

一方で、学会誌等はオンラインジャーナル化が進み、無料のPDFファイルがネット経由で多数入手できる環境に変化している。学術論文へのアクセスは、年を追って容易になっていると言えるだろうが、この状況を臨床の看護研究は生かしていない。

宇多(2012)は、1983年から2011年までの間に

臨床看護研究の実態を表している文献を抽出した結果543件あったと報告している。臨床看護研究については、多くの施設で行われていることから、看護学研究における関心も高く、外部講師の活用も進んできた。

一方で、外部講師の指導内容に関する文献は、越田らの研究(2008)など、わずかであった。臨床での看護研究を意義あるものにするためには、文献、特に学術論文の活用を進めることは必須である。文献の活用に習熟した研究者が、臨床看護研究に関わり、先行研究にあたる支援をすれば、現状が改善されるのではないだろうか。その具体的な方法を模索すべく、臨床看護研究の指導プロセスを記述し、資料として提供したいと考えた。

#### II. 研究目的

外部講師が継続した指導を行いながら、A病院の看護師が看護研究論文に文献を適切に引用していく経過を記述し、指導の効果を明らかにすることである。

#### III. 用語の定義

臨床看護研究：看護師が勤務する医療機関で取り組む看護に関連した研究活動

\*東京女子医科大学看護学部 (Tokyo Women's Medical University, School of Nursing)

\*\*東京慈恵会医科大学 (The Jikei University School of Medicine)

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究のデザインは、アクションリサーチである。アクションリサーチにも複数の種類があるが、いずれも「特定の現場に起きている特定のできごとに焦点を当て、そこに潜む問題状況（課題）に向けた解決策を現場の人とともに探り、状況が変化することをめざす研究デザイン」（江本，2010）である。本研究は其中でも研究者が主導権を持ち、現場が抱える問題を明らかにした上で現場の人に実践してもらい、効果を明らかにする（遠藤ら，2001）、テクニカルアプローチの立場をとる。

### 2. 研究参加者

東京都内にあるA病院において、平成28年度の看護研究に研究担当者として取り組み、研究相談に参加した11名。なおA病院は一般病棟、療養病棟を併せ持つ中規模病院（100～299床）である。看護研究は例年毎年行われていたが、昨年に行われなかった。今年から2年に1度看護研究の発表をする予定であった。研究者は新たに着任した看護部長の依頼で外部講師として選任された。一昨年までも、外部講師は活用していた。

### 3. 調査期間

平成28年1月18日～平成29年3月31日

### 4. アクションの内容

- 1) 過去の研究発表会資料から文献の活用状況を確認
- 2) 文献活用に関する教育講演を実施
- 3) 研究発表会までに4回研究グループに直接指導する研究相談を実施。初回の参加者には、講義で配付した文献検索に関する資料を提供し、各自で文献が活用できる力がつくよう関わる。
- 4) 研究相談以外にも、メールでの相談に適宜応じる。
- 5) 文献への関心を高め、必要な文献を入手できるような情報提供する。

### 5. データ収集方法

- 1) 現存する過去の資料として、看護部より平成24年度、25年度の看護研究論文の提供を受ける。
- 2) 研究相談の内容はICレコーダで録音した。研究に関するメールは保存し、指導経過を記録した。

最終的な成果物として、平成28年度の看護研究論文を活用した。

### 6. データ分析方法

対面での研究相談やメールの内容、および草稿を時系列に並べ、外部講師の指導内容とそれを反映した原稿を対比し、どのような介入により文献がどのように引用されていったかを整理した。また、これによって論文そのものにどのような変化が見られたかを記述する。

### 7. 倫理的配慮

研究参加者に、研究の目的・方法等について文書および口頭で説明した。その際、参加は自由意志に基づき、拒否した場合でも研究指導にあたっていかなる不利益も生じないこと、あくまでも匿名性に配慮し、研究参加者の個人情報保護されることなどを説明した。

また、本研究によって臨床看護研究の負担がさらに増すことがないように、特に留意した。具体的には、データは指導の中で取り、時間外には協力を求めなかった。なお、本研究は救世軍ブース記念病院倫理審査委員会の承認を受けて実施した（平成28年3月7日付、番号記載なし）。

## V. 結果

### 1. 過去の臨床看護研究活動からの分析

研究者が外部講師として指導にあたる前、A病院は平成26年度、27年度と2年間臨床看護研究を行っていなかった。過去の論文としては、平成24年度4本、平成25年度6本が保存されており、この10本について文献の活用という視点から評価したところ、先行研究について明文化したものは1本のみであった。逆に、文献リストがないものが1本、文献の引用がないものが5本あり、文献における学術文献の割合は半分以下であった。

文献の活用は本来目的ではなく手段であり、これによって研究目的が明確になり、研究デザインや方法が洗練されるなどの、研究の質向上が見られなくてはならない。しかし、現状では文献の活用そのものが不十分と考えられ、まずは文献が読まれ、引用されるよう働きかけることとした。

## 2. 教育講演

こうした現状分析と平行して、臨床看護研究再開の導入となる教育講演の依頼を受け、職員全員を対象に「臨床で取り組む看護研究基礎の基礎」と題した講演を、平成28年1月18日の勤務後約1時間実施した。看護研究を担当する11名の職員のうち、半数程度が参加した。内容は、1. 論文の基本的な構成、2. 文献（先行論文）の活用、の2項目に絞り、文献検索の流れを図示した。具体的には、先行研究を活用する大切さを強調し、自部署でサンプル数の少な

い調査を行うよりも、文献研究に取り組むことが有意義である、とまで強調した（図1）。参加者が少なかったため、以後の研究相談では、参加しなかった研究メンバーへの資料配付と簡単な説明も行った。

## 3. 研究メンバーと取り組んだテーマ

平成28年度A病院の看護研究を行う部署は、B病棟（一般病棟）、C病棟（療養病棟）、外来の3カ所であった。各グループの概要を表1に記す。

また、各グループが研究に取り組んだ動機を尋ね

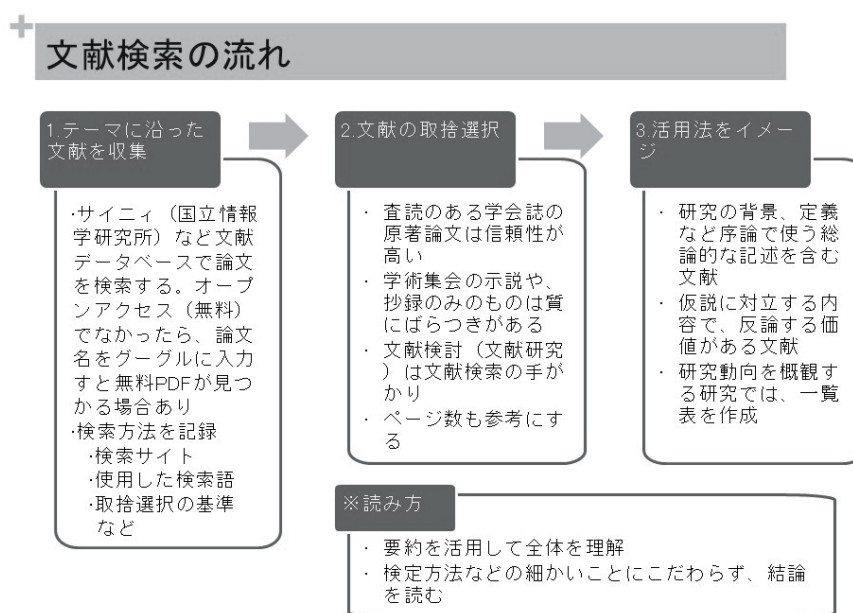


図1 教育講演で使用したスライドの一部

表1 研究参加者の概要

部署とテーマ	研究参加者	研究経験	役割など
B病棟（32床の一般病棟） 「アルコールジェルの使用を促進するアプローチの検討」	看護師 50代女性	あり	発表者
	看護師 40代女性	あり	
	看護師 30代女性	あり	
	看護師 30代男性	あり	初期に中心的役割。途中で退職
C病棟（27床の療養病棟） 「療養病棟におけるデスカンファレンスの意義を検証する」	看護師 30代女性	あり	発表者
	看護師 30代女性	あり	
	介護士 30代女性	なし	
	介護士 30代男性	なし	
外来 「トリアージの知識を深める取り組み～外来スタッフの現状の把握と今後の課題」	看護師 50代女性	あり	発表者。中心的役割
	看護師 50代女性	あり	研究経験豊富でアドバイザー的役割
	看護師 40代女性	あり	
	看護師 40代女性	あり	

ると、自部署での業務や役割があがった。B病棟は、研究メンバー中に感染リンクナースがおり、感染委員会として消毒薬の使用量を調査していた。この調査を研究に活用したいとの希望があり、「アルコールジェルの使用を促進するアプローチの検討」に決定した。また、C病棟は、今年度の業務目標にデスカンファレンスの開催があったことから「療養病棟におけるデスカンファレンスの意義を検証する」とした。外来は、病院が地区の災害時救護所に指定されており、11月にトリアージを主とした防災訓練の実施が決まっていた。その準備と看護研究が重なったため、なるべく防災訓練に関連したテーマにしたいと希望し、「トリアージの知識を深める取り組み～外来スタッフの現状の把握と今後の課題」に決まった。多忙な業務の中で研究活動を行うために、担当者は、院内の役割を含めた業務と関連した研究テーマを選択する傾向があると考えられた。

#### 4. 文献の活用を中心とした介入による変化

研究グループは年間スケジュールに沿って、期日までに研究計画書、論文を教育委員会に提出。グループによっては多少の遅れはありながらも、最終的には、2月の看護研究発表会で無事発表を終えた(表2)。この経過中、文献の活用をどのように進めたか、その介入と変化を振り返る。

各部署への具体的な介入については、図2に記す。なお、研究相談に使用した部屋には自由に使えるパ

ソコンがなく、指導の中で実際に文献を検索できなかった。ただし、多くの研究参加者が自宅または病棟でパソコンを使用しており、「Google」「CiNii」など無料の検索エンジンは活用できた。このやり方については教育講演で具体的に説明し、研究相談の際も繰り返し勧めてきた。しかし、積極的に行う様子は見られなかった。

そのため、文献検索を自主性に任せるのは難しいと考え、2回目の研究相談と3回目の研究相談の間にあたる7月半ばに、活用できる文献を研究者がネットで探して印刷し、直接病院へ送付した。その際、文献の中で論文に活用できる箇所を明示し、具体的な活用方法がイメージできるようにした。同時に、論文の形式に慣れ、参考にしてもらうため、模範となる論文を示しながら、説明を行った。

9月の研究相談の記録では、3つの研究グループの内2グループが、参考文献を自ら探していた。この変化は、具体的に文献を読み、理解が深まったことから、手探りの状態を抜け、自ら積極的に文献を探す姿勢が見られたものと考えた。

さらに、その内1グループは、これらの文献を、実際に論文のどの箇所で引用するかについても、研究相談の際に話し合い、イメージできたとの反応があった。最終的に、3グループとも、完成した論文は「はじめに」の中に先行研究の引用が適切に行われ、複数の文献を引用しながら考察が行われていた。これにより、研究目的が明確になり、研究方法が吟味

表2 平成28年度A病院看護研究指導の実際

月	年間計画		B病棟(一般病棟)	C病棟(療養病棟)	外来
4月	↑ テーマ選定		4/11 研究相談①	研究計画書案初出	
5月	↓ 文献検索	研究計画書提出	5/9 研究相談②	研究計画書案初出	
6月	↑	倫理審査	研究計画書完成 草稿指導		
7月	(倫理審査承認後) 研究実施 データ収集 結果分析		活用できる文献の 紹介(送付)	研究計画書完成	研究計画書初出 研究計画書完成
8月	考察				
9月	まとめ		9/11 研究相談③	倫理審査承認	倫理審査承認 倫理審査承認
10月					
11月					
12月	↑			草稿指導	草稿指導
1月	↓ 原稿まとめ		1/16 研究相談④ 1/16 論文提出	論文完成	論文完成 論文完成
2月			2/13 発表会		

※研究相談以外はメールでの指導

され、考察も深められた。全体として、洗練された論文となったものと評価した。

## VI. 考察

本研究は、外部講師として指導にあたった A 病院の看護師が看護研究論文に文献を適切に引用していく経過を記述し、指導の効果を明らかにすることを目的に行われた。最終的に、文献を紹介した上で、具体的な活用法までを説明した 3 つの研究グループは、論文中に文献が引用できた。これにより、洗練された論文と

なり、期待した結果は得られたと考える。この経過より、学術論文の形式に慣れない臨床看護師への指導は、模範となる論文を示しながら行うのが効果的だと感じた。

一方で、指導の経過において、文献活用が進まない理由もいくつか察知できた。この理由とそれに対する対策について、以下に考察する。

### 1. 予算と設備の不足

現在、学術論文はオープンアクセス化にシフトしており、無料で良質な論文が読める環境が整いつつ

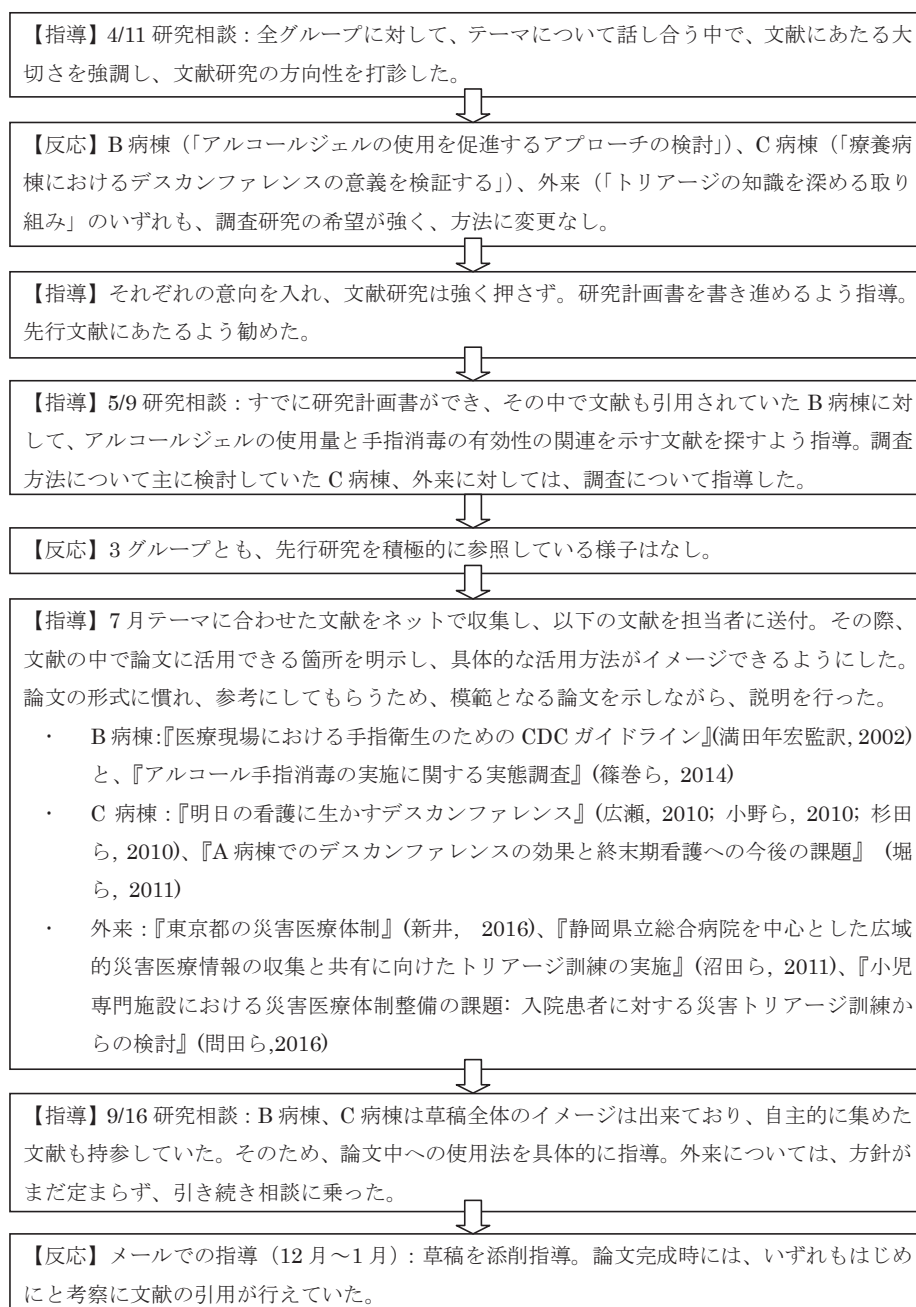


図 2 研究者の関わりに対する研究参加者の反応

ある。ただし、こうした文献にアクセスするには、パソコンや検索エンジンなどの環境は必要であり、文献活用をさらに進めるには、文献にアクセスしやすい環境を整える必要がある。こうした予算、及び設備的な限界については、いくつかの調査が指摘している（宮芝ら, 2010; 坂下ら, 2013）。

A病院においても、該当する状況であったが、このような状況でも、日本看護協会会員であれば、最新看護索引 Web の使用は可能である。とは言え、こうした個人の努力に任せる方向では、臨床看護研究の負担は大きい。持続可能な臨床看護研究を考えるならば、予算をつけ、設備を充実させることが急務であるといえよう。

## 2. 独自の発展を遂げている臨床看護研究

また、研究に関わる中で、前述のように良質な論文が入手しやすくなったにも関わらず、臨床看護研究にこれを生かせていないと感じた。今回行われた3つの研究は、いずれも研究参加者の職場で行われた調査研究であった。

調査研究には、倫理審査というハードルが設けられ、以前よりはるかに時間と労力がかかるようになった。文献研究ではこうした審査を受けずに研究ができ、かつ、関心のあるテーマに沿って学術的な文献を読み込めるメリットがあると考え、文献研究を勧めても、研究参加者の調査研究の希望は変わらなかった。

このように、臨床看護研究においては、未だ調査研究が好まれる傾向にある（坂下ら, 2012）。看護研究を負担に感じる声は多く聞かれ、今回の指導においても、研究メンバーは皆忙しい業務の合間を縫って指導を受けていた。それでも、多くの看護師は、臨床看護研究といえば自部署の調査研究に取り組もうとする。坂下らは、臨床看護研究について「学問領域でいわれるところの研究とは異なる目的をもって実施され」ており、その主な目的は「スタッフ教育であり、臨床看護研究は、継続教育としての意味合いが強い」と述べている（坂下ら, 2012）。また、スタッフ教育と並んで、患者サービスの向上と業務改善を目的としているとの指摘もある（坂下ら, 2013）。臨床看護研究は、学術研究とは別の形で、よりよい看護を求める臨床の看護師たちによって、独自の発展を遂げてきた側面がある。

臨床で働く看護師の学術論文に対する心理的な障壁は依然として大きい。結果として、大学で行われ

る学術的な研究と、臨床で行われる臨床看護研究が乖離している現状が見て取れた。大学等で行われる学術的な看護学研究成果が臨床看護研究で活用されるには、独自に発展してきた臨床看護研究という視点から十分に検討が行われる必要がある。

## VII. おわりに

臨床看護研究において、文献の活用を勧めるためには、臨床看護研究の現状を知り、可能な働きかけを考える必要がある。ライフ・ワークバランスが課題になるのは、看護の現場も例外ではない。臨床看護研究もまた、この見地から、負担と成果について十分な吟味が行われなくてはならない。多忙な中、実施する価値のある研究を行うためにも、すでに行われている研究、学術論文の活用が急務であると考え。

本研究は臨床看護研究において文献の活用を勧めることに限って、その方法を明らかにした。文献を紹介した上で、具体的な活用法までを説明する、とした指導方法は、非常に初歩的な指導であり、今後は自らが求めて必要な文献が得られるよう、指導を進化させる必要がある。

謝辞：本研究にご協力いただきましたA病院の皆様へ深く御礼申し上げます。

### 引用文献

- 新井 隆男 (2016) . 東京都の災害医療体制, 杏林医学会雑誌 . 47(1), 61-65.
- 江本 リナ (2010) . アクションリサーチとは . 筒井 真優美, 研究と実践をつなぐ アクションリサーチ入門—看護研究の新たなステージへ (1), 10-62. ライフサポート社 .
- 遠藤 恵美子, 新田 なつ子 (2001) . 看護におけるアクションリサーチ: ミューチュアルアプローチの理論 (焦点 看護実践・理論・研究をつなぐアクションリサーチ) . 看護研究, 34(6), 465-470.
- 越田 美穂子, 片山 陽子, 大西 美智恵 (2008) . 看護師への外部講師による継続した研究指導が自己効力感と自律性に与える影響 . 香川大学看護学雑誌, 12(1), 57-64.
- 広瀬 寛子 (2010) . 明日の看護に生かすデスカンファレンス (1) デスカンファレンスとは何か - 意義と実際 . 看護技術, 56(1), 64-67.
- 堀 美佳, 田屋 香織, 座光寺 史江, 他 (2011) . A病棟で

- のデスカンファレンスの効果と終末期看護への今後の課題. 信州大学医学部附属病院看護研究集録, 39(1), 24-31.
- 満田年宏監訳 (2002). 医療現場における手指衛生のための CDC ガイドライン. [http://www.imp-kokusaiigaku.com/support/download/CDC\\_handhygiene.pdf](http://www.imp-kokusaiigaku.com/support/download/CDC_handhygiene.pdf), (2016/7/17).
- 宮芝 智子, 西平 倫子, 坂下 玲子 (2010). 兵庫県下の病院における看護研究支援の実態と課題 -- 臨床実践者による看護研究への支援体制の検討. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 17, 117-129.
- 問田 千晶, 六車 崇, 橋本 圭司 (2016). 小児専門施設における災害医療体制整備の課題: 入院患者に対する災害トリアージ訓練からの検討. 日本臨床救急医学会雑誌, 19(3), 474-479.
- 中野 宏恵, 井上 知美, 東 知宏 (2014). 臨床現場における看護研究の実施にともなう看護師の体験. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 21, 11-21.
- 日本看護協会 (2003). 看護師の倫理綱領, <http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/rinri.html>, (2016/2/8).
- 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎 (2011). 静岡県立総合病院を中心とした広域的災害医療情報の収集と共有に向けたトリアージ訓練の実施. 地域安全学会論文集 (15), 373-383.
- 小野 芳子, 有井 美佐子, 原 淳子 (2010). 明日の看護に生かすデスカンファレンス (3) 山口赤十字病院緩和ケア病棟でのデスカンファレンスの実践. 看護技術, 56(3), 248-253.
- 宇多 絵里香 (2012). 臨床看護研究に関する文献検討 (特集 臨床看護師が取り組む研究モデルの探究). 看護研究, 45(7), 630-637.
- 坂下 玲子, 西平 倫子, 西谷 美保 (2012). 臨床看護師が取り組む看護研究の実態 (特集 臨床看護師が取り組む研究モデルの探究). 看護研究, 45(7), 638-642.
- 坂下 玲子, 北島 洋子, 西平 倫子, 他 (2013). 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学会誌, 33(1), 91-97.
- 篠巻 愛里, 東 彩奈, 中田 美香, 他 (2014). アルコール手指消毒の実施に関する実態調査. 鳥取大学医学部附属病院看護部院内看護研究発表, 25, 122-131.
- 杉田 智子, 田村 恵子 (2010). 明日の看護に生かすデスカンファレンス (2) 淀川キリスト教病院のデスカンファレンスの進め方. 看護技術, 56(2), 158-161.